

①

余白  
20  
ミリ

余白  
23  
ミリ

# ジョン・アップダイクにおける「老い」

## —フィクションのナショナリズム—

②

漢数字を使用してください。  
ただし、欧語の参考文献の書誌情報中の数字や、注番号を除きます。

1行空行

中谷崇

(国際教養学系)

1行空行

③

はじめに

これまでアップダイクは、彼自身の生活と思考の場になっている二〇世紀アメリカ合衆国の中産階級の生活を繰り返し描いていることから、個人の作ったフィクションを越えて、合衆国そのものの姿を写し出している作家と捉えられる傾向が強かった。このようなアップダイク観は、彼の作品が、小説としてよりもむしろ文学形式のルポタージュのように評価されることが多かったということでもある。

1行空行

## 第一節 □ ナショナリズム

1行空行

一、一、□ 言語的人工物としての「アメリカ」

⑤

孤立行の例

余白  
23  
ミリ

①

余白  
20  
ミリ

⑦

1行空け



出典：筆者作成

図1 □ 「古い」の表象化に関するアップダイクの問題意識

⑧

2行にまたがる場合、2行目以降の先頭位置はここ。

それでは、アップダイクが小説の言葉によって表象(代行)しようとする「アメリカ」とはどのような言語的人工物なのだろうか。そして、そのような言語的人工物を「作る」ためにはどのような「言葉」社会的なマクロの視野で言えば「文学」「芸術」「文化」といった枠組み、アップダイク自身に即したミクロの視野で言えば、彼の「芸術」指向の表れとして時に高く評価され時には逆に批判される文体、特にその細密描写が駆使されているのだろうか。

## (二) 短篇「鳩の羽根」

アップダイクの短篇として最も有名な作品の一つ「鳩の羽根」は「死」と「芸術」の問題を直接扱っており、合衆国における「古い/死」をどのような「言葉/文学/芸術」で表象するかという作家の問題意識という形で捉え直せば、これらは「はじめに」で示した一対をなす問いに対応している(図一)。

⑥

まずこの作品のストーリーを簡単に確認しておく。幾分少年時代のアップダイク自身を思わせる少年デイヴィッド(David)は、一家と一緒に田舎に引っ越して来て、他にやる事がないまま読書に耽っていたある時、H・G・ウェルズ(H.G. Wells)の本『世界大文化史』(The Outline of History)で、キリスト教はキリストの思想そのものとは無関係にでっち上げられてきたいかがわしい体制

だという記述を読み、死、正確に言えば虚無に対する恐怖に取り付かれる。社会体制の中で受け入れられている正  
式の教会の牧師も両親も彼の問いに対して満足な答えを出せず、彼らの宗教心が一種の体制順応的な思考停止に過  
ぎないという印象を彼は受ける。結局、彼は結末の部分で、納屋に住み着き、仕舞ってある家具その他を糞で汚す  
鳩を、母親に言われて銃で始末したとき、自分が殺した鳩の造形の精妙な美しさに気づき、取るに足らない鳩にさ  
えこれほど手をかけて作った神が自分を消滅させるわけではないと考える。

⇔ 1行空け

⑨ 益もない鳥に神様がこれほど凝った意匠を惜しげもなくついやされるのであれば、デイヴィッドの生命を死の  
世界に導き、自らの創造の天地をすべてうちこわされるはずがない、と彼は信じた (Updile, 1962, 日本語訳  
△頁)。

⇔ 1行空け

これより以前、母エルシーが自分の世界観のもと、マタイによる福音書に従って息子を「欲深い」とたしなめた  
ことがあったが、この最後のセリフも同じマタイによる福音書の一節がもとになっているのではないかと考える。

## 第二節 ナシヨナリズムからの逸脱としての、「老人」の表象

### 二. 一. アップダイク作品に特徴的な「死／衰弱」のテーマ

#### (二) 「鳩の羽根」において

第一節では「鳩の羽根」をデイヴィッドの「死／虚無」に対する恐怖の物語として検討してきた。しかし、虚無

への恐怖とそれからの救いのストーリーだけに集約されるものとして読むには、何故作品に組み込まれなければならないのか説明できない細部がこの作品には多過ぎる。

(二)『ブアハウス・フェア』(The Pothouse Fair) 以降の作品

長編第1作『ブアハウス・フェア』以降、アップダイクの作品では、一般的に、「若い国の若い文学」とされることの多いアメリカ文学としては例外的なくらい頻繁に老人が重要な位置を占めている。

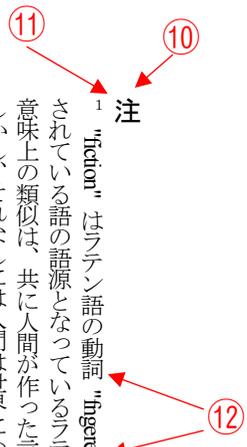
おわりに

アップダイクは、自国アメリカ合衆国の思考が、第一に、文明としてのヨーロッパに対するアンチテーゼとしての「自然」が肯定的な自己像を作る根拠として必要だったこと、そして第二に、文化的なトポスとして「自然」を崇拜の対象にしたロマン主義の時代としての一九世紀に合衆国が近代国家として確立されたという非本質的な事情から来るナシヨナリスティックなフィクションに支配されていること、そしてその結果、自分にとって本来大切な存在である「文学」あるいは「芸術」の言葉が、「老人」や「不活発な男」などといった存在を隠蔽する不自由さで暴力的な権力装置として、少なくとも合衆国では機能してしまっているという困った事態に直面した。

そこで、それに文学者として対処するため、新たな「言葉」、の提示を試み、それらによって「若い国」としての合衆国のナシヨナリスティックな自己像温存のために隠蔽されていた現実を復権するのである。

本文の最終行の注のめいたはる行空によう。

注



1 "fiction" はラテン語の動詞 "fingere" (作る) を語源としている。一方、"fact" (事実) という、日常用語のレベルでは対立概念と理解されている語の語源となっているラテン語の動詞 "facere" も、ほぼ同じ「作る」という意味である。このような、語源の上での両者の意味上の類似は、共に人間が作った言語的人工物であり、したがってそれは意識するとしなないと関わらず現実にはバイアスをかけるがしかし、それなしには人間は世界について思考できないというジレンマを抱えていることを示唆している。だからこそ我々は、狭い意味での「文学」の外にある「現実」の生活をいかに「フィクション」が規定しているかという問題について意識的になる必要があるのである。

2 "fiction" と "fact" を語源のレベルで結び付けている「作る」というアップダイクにとつて、繰り返し作品の中で扱っている重要なテーマである。このテーマについては、中谷 一九九三年を参照されたい。  
 3 初出は *The New Yorker* 37 (August 19, 1961)。短篇集 *Pigeon Feathers and Other Stories* (New York: Knopf, 1962) に収録。

注し参考文献一覧のあとには必ず行記を付ける。

参考文献一覧

〔書籍・論文〕

Chase, Richard, *American Novel and Its Tradition*, Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 1957.

Updike, John, "Pigeon Feathers," *Pigeon Feathers and Other Stories*, New York: Knopf, 1962 (岩本巖訳 (1995) 『シモン・アップダイク自選短編集』新潮社 一九九五年)。

Wells, H. G. *The Outline of History*, London: George Newne, 1920.

大江健三郎『小説のたぐらみ、知の楽しみ』新潮社、一九八五年

亀井俊介『アメリカ文学史講義』南雲堂、一九九七年

鈴江璋子『ジョン・アップダイク研究 初期作品を中心に』開文社出版、二〇〇三年

中谷崇『ジョン・アップダイクの『ブアハウス・フェア』における反・崩壊への教育』『女子美術大学紀要』第二号、

一九九三年

——『アップダイクの『帰ってきたウサギ』とペンシルヴェニア』渡辺利雄編『読み直すアメリカ文学』研究社、

一九九六年

宮本陽吉『アメリカ小説を読む』集英社、一九七七年

1行空行

MEMOサイト

Academy of Achievement Homepage, "John Updike" <<http://www.achievement.org/achiever/john-updike/>> (最終閲覧日二〇

一六年二月一四日)

〔執筆見本終わり〕

執筆見本において、番号を付した点について

- ① 用紙サイズはA5とし、1頁当たり51字×18行となります。  
余白の数值はMSワード2016の場合、それ以前のバージョンや、異なるアプリの場合、多少前後するかも知れませんので、適宜調整してください。
- ② 論文タイトルはMS明朝・太字・14ポイント（副題は12ポイント）で入力、中央揃えにしてください。  
氏名はMS明朝・太字・14ポイントで入力、下揃え。
- ③ 氏名の左に、所属字系を丸カッコで括弧てを入力、下揃えにしてください（フォントは④-①（1）と同じ）。
- ④ フォントは次のとおりとなります。  
（1）本文、図表の出典、参考文献一覧中の文字：  
◆漢字、ひらがな、カタカナ→既定のフォント・既定のポイント数（MSワード2016ではMS明朝・105ポイント）。※1  
◆半角アルファベット、半角数字：Times New Roman・既定のポイント数。半角文字を用いる場合。  
※2

- (2) 数字は、基本的に漢字にしていただく(ただし、注番号や、欧語の参考文献の書籍情報中の数字を除く)。
- (3) 本文の節・項などの見出し、図表タイトル、文末の「注」(後注方式を選択した場合)、「参考文献一覧」およびその中のカテゴリーの見出し：MS、リック体・既定のpt数。
- (4) 注：フォントは本文に準拠、ただし文字サイズは9ポイントとしてします。行間は既定値としていただきます(ワードの注機能を使用する場合、本文部分のみも狭くなる場合があります)。

※1 そうしなれば、頁設定を51字×18行として、その頁にはなりません。

※2 注番号(上付き)4分の1角(こ)にしては、この限りはあません。

⑤

- (1) 節は「第一節」「第二節」、項は「1」「1.1」「1.1.1」…の表記に統一します。項以下のサブカテゴリ番号の振り方については著者の自由に委ねます。
- (2) 節・項の番号は、それぞれの見出しの先頭文字のあいだに全角1文字分のスペースを入れてください。
- (3) 節・項の番号・見出しは上揃えとします。
- (4) 節の前後は1行空けとしてください。また、節と項、および項と項以下のあいだも1行空けとします。それぞれの見出しが頁の右端／左端に揃う場合は、上記の通り、行を空けておいてください。
- (5) 項以下の同一セクションのあいだは、1行空けとしても、詰めても構いません。
- (6) 上記の指示とおりに行空けをしたとき、孤立行が生ずることがあるかもしれませんが、論文の分量やワードの都合など、そのまじりにおいてください。組版・印刷時に適宜処理します。

⑥ 図表タイトル(以下⑦)や長文の引用(以下⑨)も右記のとおり。

① カッコ類、コンマ、ピリオドなどの記号は全角(既定フォント)、半角(Times New Roman)のどちらを使っても構いません。

ただし、日本語の記述中では「 $\downarrow$ 」理由がなにかぎり、全角の記号の使用を推奨いたします(ただし、注番号に付く丸カッコ、例えば、「1)」についてはこの限りではありません)。

② 半角記号を使う場合、その前後に適宜スペースを入れてください。

● 次の半角記号は、直後に半角スペースを入れる：

コンマ、ピリオド、コロ、セミコロ、疑問符、感嘆符、閉じカッコ類、閉じ引用符。

● 開きカッコ類、開き引用符、単位の直前には半角スペースを入れる。

[例] ○ 大学(院)生 × 大学(院)生

○ p.138 × p.138

○ 11% × 11%

③ 全角記号の前後にはスペースの挿入は不要です(ぶつは自動的にスペースが挿入されるはず)。よって、半角記号の直前・直後が全角記号である場合、(2)は不要です。

⑦ (1) 図表の前後は1行空けてください。

(2) 図の場合、上から図↓出典↓図タイトルの順にレイアウト。

表の場合、上から表タイトル↓表↓出典の順にレイアウト。



方がわからない場合、そのままにしておいても構いません。  
なお、脚注方式にした場合、境界線を消す必要はありません。

⑫

引用符が正しい向きになっているかどうか注意してください。なお、この執筆見本では左右の区別のない半角アポストロフィを使用しております。それは左右の区別のある半角アポストロフィを使うと、既のようにアポストロフィが正しい向きにならないためですが、皆様は左右の区別のある半角アポストロフィを使用していたとしても構いません。組版・印刷時に調整し、半角アポストロフィを右方向に90度回転させます。

ちなみに、注番号に半角の数字やカッコを使用した場合も同じことがいえます(数字とカッコが横倒しになってしまったりはしません)。そのため組版・印刷時に調整します。

⑬

(1) 論文末に参考文献一覧を付さない方法と、付す方法との二通りありますが、どちらの方式を採用しても構いません。

(2) 一覽には原則として、本文中で引用ないし言及した文献や、図表の出典のみを載せてください。

ただし、執筆者の所属する研究分野において、参照した文献も載せることが標準的である場合や、その他の理由がある場合には例外として許可します。「原稿提出用紙」の該当の欄にその旨記入してください。  
(3) 本文ないし注、および参考文献一覧への書誌情報の表記については、執筆者の所属する研究分野において標準的な表記法にしたがってください。

〔表記法の一例〕 MA スタイル、APA スタイル、シカゴスタイルなど

⑭

- (1) 参考文献一覧では行間が本文部分と同じになるようにしてください。
- (2) 参考文献一覧において、文献をカテゴリ別に分けて記載する場合、執筆者の所属する研究分野の標準にしたがい、カテゴリ分けをしてください。
- (3) 文献の記載順についても、執筆者の所属する研究分野の標準にしたがってください。

⑮

- (1) ひとつの文献の書誌情報が2行以上にまたがる場合、2行以下は全角2文字分けてください。
- (2) 同一カテゴリ内の文献と文献のあいだは行を空けず、カテゴリ間は1行空けにしてください。